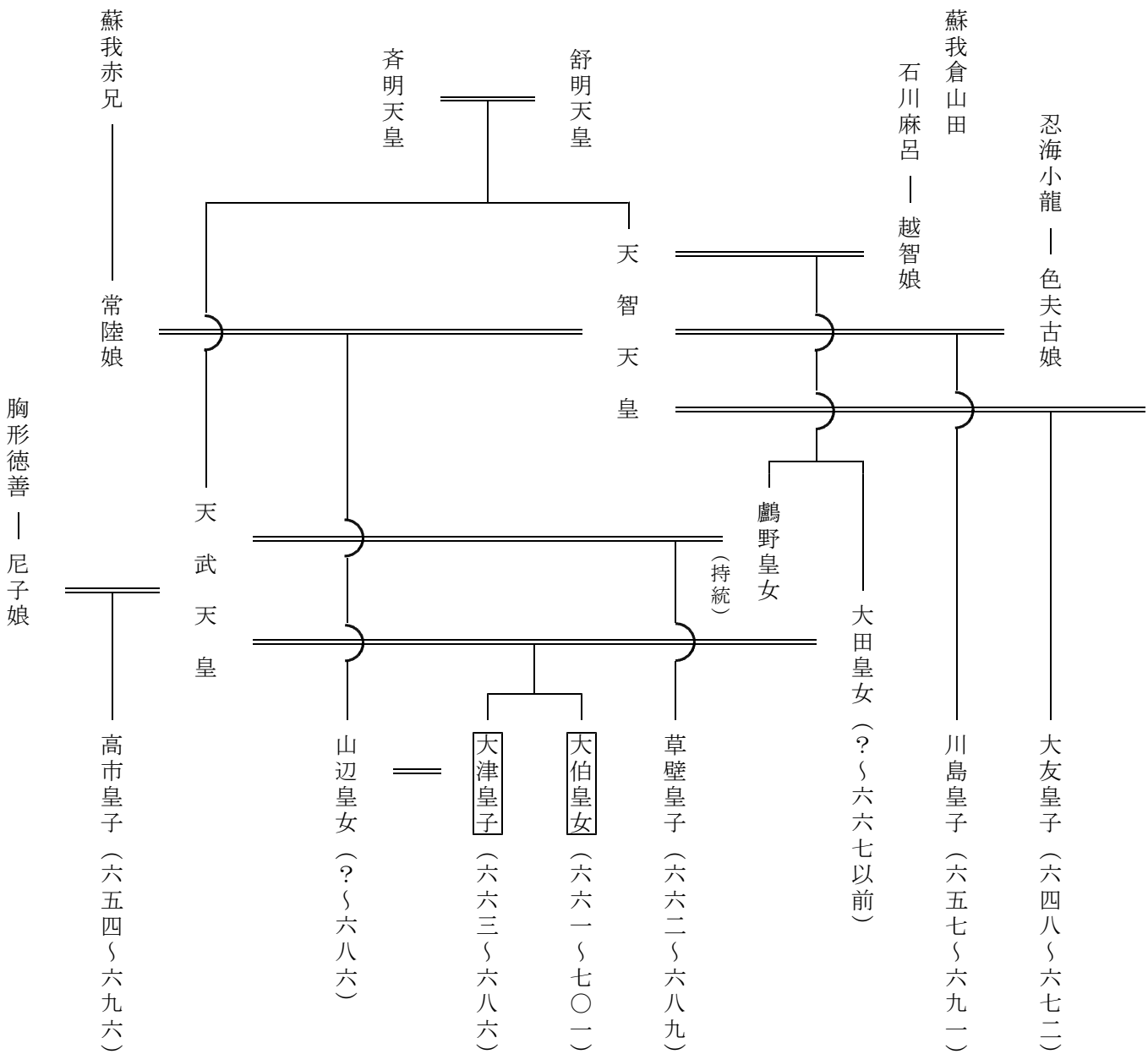


大津皇子・大伯皇女

群馬県立女子大学名誉教授 北川 和秀

伊賀采女宅子娘



大津・大伯関係年表

西暦	年号	干支	天皇	事項
六六一	齊明七	辛酉		新羅に進發。大伯皇女誕生。齊明天皇没
六六二	天智元	壬戌		草壁皇子誕生
六六三		癸亥		大津皇子誕生。白村江の戦い。百濟滅亡
六六四		甲子		
六六五		乙丑		
六六六		丙寅		
六六七		丁卯		この年以前、大田皇女没。近江大津宮に遷都
六六八		戊辰	天智	蒲生野に遊獵
六六九		己巳		藤原鎌足没
六七〇		庚午		
六七一	一〇	辛未		天智天皇没
六七二	天武元	壬申		壬申の乱。飛鳥浄御原宮に遷都
六七三		癸酉	天武	大伯皇女伊勢齋宮
六七四		甲戌		大伯皇女伊勢に向かう
六七五		乙亥		
六七六		丙子		
六七七		丁丑		
六七八		戊寅		
六七九		己卯		
六八〇		庚辰		草壁皇子立太子
六八一	一〇	辛巳		
六八二	一一	壬午		大津皇子朝政に参画
六八三	一二	癸未		
六八四	一三	甲申		
六八五	一四	乙酉		
六八六	朱鳥元	丙戌		天武天皇没。大津皇子に死を賜わる。大伯帰京
六八七	持統元	丁亥		
六八八		戊子		草壁皇子没
六八九		己丑		高市皇子太政大臣に任官
六九〇		庚寅		
六九一		辛卯		
六九二		壬辰		

大 伯

大 津

六九三	七	癸巳	藤原宮に遷都	33
六九四	八	甲午	高市皇子没	34
六九五	九	乙未		35
六九六	一〇	丙申	大宝律令を制定。大伯内親王没	36
六九七	元	丁酉		37
六九八	二	戊戌		38
六九九	三	己亥		39
七〇〇	四	庚子		40
七〇一	元	辛丑	大宝律令を制定。大伯内親王没	41

A 天皇、有司に命せて壇場を設けて、飛鳥淨御原宮に即位す。正妃を立
てて皇后とす。后、草壁皇子尊を生れます。先に皇后の姉大田皇女を納して妃とす。
大来皇女と大津皇子とを生れませり。(日本書紀 天武二年(六七三)二月二十七日)

B 御船西に征きて、始めて海路に就く。(同 斉明七年(六六一)一月六日)

C 御船、大北海に到る。時に、大田姫皇女、女を産む。仍りて是の女を名けて、大伯
皇女と曰ふ。(同 同八日)

D 天豊財重日足姫天皇と間人皇女とを小市岡上陵に合せ葬せり。是の日に、皇孫
大田皇女を、陵の前の墓に葬す。(同 天智六年(六六七)二月二十七日)

《参考》

◎ 斉明天皇の墓、ほぼ确实 牽牛子塚古墳は八角形墳 奈良

大化改新で知られる中大兄皇子(天智天皇)の母、斉明天皇(594〜661)の墓
との説がある奈良県明日香村の牽牛子塚古墳(国史跡)が、当時の天皇家に特有の八角形
墳であることが確認された。明日香村教育委員会が9日、発表した。墳丘全面が白い切り
石で飾られ、内部の石室も巨大な柱状の切り石で囲われた例のない構造だったことも判明。
斉明天皇は巨石による土木工事を好んだとされ、被葬者が同天皇であることがほぼ确实に
なった。

明日香村教委は、飛鳥地方の古墳群と藤原宮跡の世界遺産登録に向け、牽牛子塚古墳を
昨年9月から調査。墳丘(高さ約4.5メートル)のすそは上からみると八角形状に削ら
れており、北西のすそから3辺分の石敷き(長さ約14メートル)が見つかった。縦40
〜60センチ、横30〜40センチの凝灰岩の切り石が石畳のように3列(幅約1メー
トル)にすき間なく並べられており、八角形になるように途中で約135度の角度で折れ曲

がっていた。

墳丘は対辺の長さが約2.2メートルで3段構成だったと推定され、石敷きの外側に敷かれた砂利部分を含めると約3.2メートルに及ぶという。三角柱状に削った白い切り石やその破片が数百個以上出土し、村教委は、これらの石約7200個をピラミッド状に積み上げて斜面を飾っていたとみている。

また、墳丘内の石室（幅5メートル、奥行き3.5メートル、高さ2.5メートル）の側面が柱状の巨大な16の安山岩の切り石（高さ約2.8メートル、幅1.2メートル、厚さ70センチ）で囲まれていたことも確認された。

過去の調査では、石室が二つの空間に仕切られていたことが判明している。斉明天皇と娘の間人皇女を合葬したと記された日本書紀の記述と合致するほか、漆と布を交互に塗り固めて作る最高級の棺「夾紵棺」の破片や間人皇女と同年代の女性とみられる歯などが出土していた。

これまでの発掘成果と合わせ、「一般の豪族を超越した、天皇家の権威を確立するとう意思を感じる。斉明天皇陵と考えるほかない」（白石太一郎・大阪府立近つ飛鳥博物館長）など、専門家らの意見はほぼ一致している。

一方、宮内庁は同古墳の西に約2.5キロ離れた円墳の車木ケンノウ古墳（奈良県高取町、直径約4.5メートル）を、文献や伝承などから斉明天皇陵に指定。「墓誌など明らかな証拠が出ない限り、指定は変えない」（福尾正彦・陵墓調査官）としている。

現地見学会は11、12日の午前10時〜午後4時。近鉄飛鳥駅から徒歩15分。問い合わせは村教委文化財課（0744・54・5600）へ。（渡義人）

（2010年9月9日22時43分 アサヒコム）

◎中大兄皇子の娘「大田皇女」の墓か 牽牛子塚古墳の近く

斉明天皇（594〜661）の墓と確実視されている奈良県明日香村の牽牛子塚古墳（7世紀後半）の約20メートル南東で新たに棺を納める別の石室が見つかり、同村教育委員会は9日、この石室周囲を地名から「越塚御門古墳」と名付けた、と発表した。石室の位置関係などが、斉明天皇の墓の前に中大兄皇子（後の天智天皇）の娘「大田皇女」が葬られたとする奈良時代の歴史書「日本書紀」の記述と符合しており、専門家は日本書紀の記述を裏付ける歴史的な発見として注目している。

新たな石室は木棺を置く床石と、それを覆う天井石を組み合わせたドーム状。幅3メートル、奥行き3.5メートル、高さ2.6メートル。天井石は壊れ、一部しか残っていないが、床石はほぼ完全な状態で出土した。

大田皇女は飛鳥時代の政治改革「大化の改新」の立役者・中大兄皇子の娘。夫は中大兄皇子の弟・大海人皇子（後の天武天皇）だが、夫の即位前、2人の子どもを残して他界したとされている。

現地見学会は11、12日の午前10時〜午後4時。近鉄飛鳥駅から徒歩15分。問い合わせは村教委文化財課（0744・54・5600）へ。（渡義人）

（2010年12月9日17時17分 アサヒコム）

E 且あしたに、朝明郡の迹太川の辺へにして、天照太神を望拜たよせにをがみたまふ。是の時に、益人ますひと到りて、奏して曰まうさく、「関に置らしめし者は、山部王・石川王に非ず。是大津皇子なり」とまうす。便すなはち益人に随ひて参来まうきたる。…：：：天皇おほ大きに喜びたまふ。

（同 天武元年（六七二）六月二十六日）

F 大来皇女を天照太神宮に遣侍さむとして、泊瀬斎宮に居らしむ。是は先づ身を潔めて、稍ややに神に近づく所なり。（同 同二年（六七三）四月十四日）

G 大来皇女、泊瀬斎宮より、伊勢神宮に向でたまふ。（同 同三年（六七四）十月九日）

H 草壁皇子尊を立てて、皇太子とす。（同 同十年（六八一）二月二十五日）

I 大津皇子、始めて朝政を聴しめす。（同 同十二年（六八三）二月一日）

J 天淳中原瀛真人天皇崩りましぬ。皇后、臨朝称制す。

（同 朱鳥元年（六八六）九月九日）

K 皇子大津、謀反みかどかたがけむとして発覚あらはれぬ。皇子大津を逮捕つかめて、并あはせて皇子大津が為に誅誤あざむかれたる直ぢきく肆わうし八口朝臣音おと櫃こ・小山下せうせんげ老伎連ゆきのむらじはかとこ博徳と、大舍人中臣朝臣麻呂・巨勢朝臣多益須・新羅沙門行心、及び帳内礪杵道作等、三十余人を捕つかむ。

（同 同十月二日）

L 皇子大津を詔語田の舎に賜死みまからしむ。時に年二十四なり。妃皇女山辺、髪を被くしして徒跣そあしにして、奔はしり赴ゆきて殉ともぬ。見る者皆歎なげ歎げく。皇子大津は、天淳中原瀛真人天皇の第三子みはしらにあたりたまふみこなり。容止みかほたか牆さかく岸さかしくして、音辞みことば俊すく朗あきらなり。天命あめみことひらかすわけ開あきら別あきら天皇の為に愛めぐまれたてまつりたまふ。長ひととなるに及びて弁わかしくして才学かどま有あす。尤も文筆ふみつくることを愛このみたまふ。詩賦しふの興おこり、大津より始れり。（同 同三日）

M 皇子は、淨御原帝の長子なり。状貌魁梧、器宇峻遠。幼年にして学を好み、博覧にして能く文を属つづる。壮さかり及びて武を愛み、多力にして能く剣を撃つ。性頗る放蕩はうたうにして、法度に拘かかれず、節せつを降くだして士を礼あやびたまふ。是れに由りて人多く附託ふたたくす。時に新羅僧行心といふもの有り、天文卜筮てんもんぼくせいを解しる。皇子に詔つげて曰いはく、「太子の骨法、是れ人臣の相さうにあらず、此これを以もちて久しく下位かみに在らば、恐るらくは身を全くせざら

む」といふ。因りて逆謀を進む。此の註誤に迷ひ、遂に不軌を凶らす。嗚呼惜しき哉。彼の良才を蘊みて、忠孝を以ちて身を保たず、此の奸豎に近づきて、卒に戮辱を以ちて自ら終ふ。古人の交遊を慎みし意、因りて以みれば深き哉。時に年二十四。

(三) 首 略)

五言。臨終。一絶。

金鳥西舎に臨らひ、鼓声短命を催す。泉路賓主無し、此の夕家を離りて向かふ。

(懐風藻 大津皇子)

N 皇子は、淡海帝の第二子なり。志懐温裕、局量弘雅。始め大津皇子と、莫逆の契を為しつ。津の逆を謀るに及びて、島則ち変を告ぐ。朝廷其の忠正を嘉みすれど、朋友其の才情を薄みす。……(懐風藻 河島皇子)

O 詔して曰はく、「皇子大津、謀反けむとす。註誤かれたる吏民・帳内は已むこと得ず。今皇子大津、已に滅びぬ。従者、当に皇子大津に坐れらば、皆赦せ。但し礪杵道作は伊豆に流せ」とのたまふ。又詔して曰はく、「新羅沙門行心、皇子大津謀反けむとするに与せれども、朕加法するに忍びず。飛驒国の伽藍に徙せ」とのたまふ。

(日本書紀 朱鳥元年(六八六)十月二十九日)

P 伊勢神祠に奉れる皇女大来、還りて京師に至る。(同 同十一月十六日)

Q 大伯内親王薨しぬ。天武天皇の皇女なり。

(続日本紀 大宝元年(七〇一)十二月二十七日)

大津皇子、竊かに伊勢の神宮に下りて上り来ましし時の大伯皇女の御作歌二首

①わが背子を大和へ遣るとさ夜深けて 暁露にわが立ち濡れし(二・一〇五)

②二人行けど行き過ぎ難き秋山をいかにか君が独り越ゆらむ(二・一〇六)

大津皇子、被死らしめらゆる時、磐余の池の陂にして涕を流して作りましし御歌一首

③ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ(三・四一六)

右、藤原宮の朱鳥元年冬十月なり。

大津皇子薨りましし後、大来皇女伊勢の斎宮より京に上る時の御作歌二首

④神風の伊勢の国にもあらましをなにか来けむ君もあらなくに(二・一六三)

⑤見まく欲りわがする君もあらなくになにか来けむ馬疲るるに(二・一六四)

大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬る時、大来皇女の哀しび傷む御作歌二首
⑥うつそみの人にあるわれや明日よりは二上山を弟世とわが見む(二・一六五)

⑦磯のうへに生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君がありと言はなくに(二・一六六)
右一首、今案ふるに、移し葬る歌に似ず。けだし疑はくは、伊勢の神宮より京に還る時、路のへに花を見て感傷哀咽してこの歌を作るか。

大津皇子、石川郎女に贈る御歌一首

⑧あしひきの山のしづくに妹待つとわれ立ち濡れぬ山のしづくに(二・一〇七)

石川郎女、和へ奉る歌一首

⑨吾を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくに成らましものを(二・一〇八)

大津皇子、竊かに石川女郎に婚ふ時、津守連通その事を占へ露はすに、皇子の作りましし御歌一首 未だ詳らかならず

⑩大船の津守の占に告らむとはまさしに知りてわが二人宿し(二・一〇九)

日並皇子尊、石川女郎に贈り賜ふ御歌一首 女郎、字を大名児といふ

⑪大名児を彼方野辺に刈る草の束の間もわれ忘れめや(二・一一〇)